

旬じょうはん

情勢判断学会 東京本部
 会員向けニューズレター
 発行人 古川 彰久
 事務局 〒252-0321 神奈川県
 相模原市南区相模台1-23-9
 Tel.&Fax.
 042-748-8240
<http://www.jouhan.com>
 E-mail:info@iki2life.com

12月例会ご案内

日時 : 12月8日 木曜日
 18:30 ~ 20:30
 場所 : 港区立産業振興センター
 10階 会議室3
 会費 : 1000円
 テーマ : 「東西古今人間学2」後編
 テープを聴く
 演者 : 塩沢 貴良

【第3章ナポレオンと秀吉に見る科学的計算性】

(1) ナポレオンとヒトラーの戦略と戦術

ナポレオンの良かった戦術点は以下の2点。

① 大砲の新しい使い方

ナポレオンはそれまでの戦争の方法を変えた。王宮に籠もる王統派に対し、大砲を一番前に配置することでたちまちに鎮圧した。それまでの大砲の使い方は、あまり価値のあるものと認められず、戦いは騎兵の突撃が強力であると考えられていた。

② ツーロン軍港

フランス軍はツーロン軍港からイギリス軍を追い出したかったが、イギリス海軍の砲撃に悩んでいた。ここでも大砲の使い方を工夫した。大砲を海の向こうの山の上に上げてしまった。山の上からの砲撃にイギリス海軍は撤退を決めた。

(2) ナポレオンとヒトラーがロシアに負けた理由の共通点

ナポレオンとヒトラーには共に戦略がなかった。ナポレオンはモスクワまで勝ち進めた。勝ち戦を続ければ相手は降参するだろうという形で、戦略をロシアに預ける形で、待ち続けるうちに、町を焼かれ飢えと寒さで撤退した。

ヒトラーはソ連戦車に対し飛行機による急降下爆撃という戦術でレニングラードまで勝ち進んだ。しかしながら、そのうち降伏するだろうと戦略を相手に預け、敗退した。

まとめ:ナポレオンの大砲、ヒトラーの飛行機の使い方などは科学的計算性がなされていた。

しかしながら、戦略がないと失敗に終わる例である。

(3) 秀吉の戦略と戦術

秀吉の取った優れた2つの戦術

① 短期決戦 賤ヶ岳の合戦

柴田軍2万7千に対し、秀吉3万人とほぼ五角の兵力であった。柴田が治める北陸は雪の深い地で、冬期は大軍を一挙に押し進めることが出来なかった。山を越えて佐久間盛政が出てきた所を、3万の兵が集結するのに通常3日かかる52キロの道のりをたった5時間で到着した。秀吉の戦略は「最小の損害で柴田軍を滅ぼす。」その戦術は相手の兵力が分散した時に全兵で攻略することであり、柴田本体との戦い時はほとんど損害を受けなかった。

② 長期戦 鳥取城攻略

秀吉は事前に商人を使って、鳥取城下の兵糧を買い集めさせた。倍の値段と知った城に蓄えてあった兵糧も2-3ヶ月先の刈り入れを考えて、お城の米を売ってしまった。刈り入れ前に秀吉軍に取り囲まれ、戦闘はほとんど行なわれることなく、秀吉が勝利した。

秀吉の戦略 小牧長久手の戦い

秀吉の戦略決定はうまかった。全国制覇を目指す秀吉は家康と戦い消耗することを恐れた。そのすぐれた戦略は「家康を配下にする事」である。そのために取られた優れた戦術は2つである。

① 戦に負ける

家康は面子にこだわる。兵も強い。そこで秀吉は少し負け戦をして、和平交渉を行ない、懐柔したと城野氏は解釈している。理由は長久手の作戦自体が敵のホームグラウンドに入る大変無謀な戦いであること。秀吉の軍は失敗したら全滅が当たり前の奇襲兵力1万何千の兵に対し、約1千名と軽微であり、徳川軍も700名の損害を出した。

② 妹と母を人質に出す

強い側が弱い立場の国に人質を出すのは逆である。家康は恩義を感じ軍門に降る。秀吉の戦略に屈したのである。

10月例会報告

日時 : 10月13日 木曜日
18:30 ~ 20:30
場所 : 港区立産業振興センター
10階 会議室3
テーマ : 「東西古今人間学1」後編
テープを聴く
演者 : 神前直哉

今回も東西古今人間学のテープを聞きながら次の内容について学習を行った。

【桶狭間の合戦の信長に学ぶ】

(1)信長の戦略決定

①桶狭間の戦い

「織田信長という人間は決心が早いとか、短期でるとかいらわれています。信長が短期で奇襲戦のうまい男だといわれているのは、彼を小説に書いた作家たちがいつていることで、奇襲戦をやったのは桶狭間の戦いの一回だけです。ところがこれ以外には信長は短期決戦の奇襲をやっていないのです。のちに斎藤や浅井・朝倉と戦った時にはじりじりと長期の戦争をしているわけです。

この桶狭間の戦いを分析すると信長が世間でいわれているような人物であるとは思えないのです。信長は清州に住む二十万石か三十万石の兵力数も約三千人位の小大名でした。対する今川義元は二万七千の兵を連れて尾張の国に出兵しました。

この戦力差の中、信長は「戦う」という戦略決定を下しました。そして戦術は、北の斎藤とは仲良くする、東の今川と戦うということを決めたわけです。信長は斎藤道三の娘を嫁に迎え、北の斎藤家から攻められる二方面作成を避けたわけです。二方面作戦というのは大変難しい作戦であり、信長が戦うということだけを決意して、斎藤も戦い、今川とも戦うということをしていたら両方から攻められて、歴史上に名を残すことはできなかったと思うんです。この戦略決定が良かった。」

②一級・二級・三級の人物

「一級の人物とは、本人が何もいわなくても相手の気持ちや行動が理解できる人をいいます。二級の人物は、相手が説明してくれなくては作戦が立てられない人です。三級というのは、説明してもわからない人物をいうのです。人の上に立つ人は一級人物にならなければならないと思うのです。」

(2)信長の戦術決定

①敵を知り、己を知る

「相手の行動、気持ちを判断するにはまず材料集めからする必要があります。また、外に出て9倍の敵と戦うにはどうしたらよいか。これは科学的に計算ができます。『敵を知り己を知れば、百戦

危うからず』まず敵と味方の力関係を知ることです。それには敵の兵力、編成、装備、それから教育訓練を知ることです。そして、味方の兵力、編成、教育訓練を知らなければなりません。」

②地形・気象を考える

「狭間というのは大軍であればあるほど長い縦列になります。信長は三河から尾張にかけての地形については十分心得ていたと思います。ですから、今川軍は棒のように長い列で進軍してくることが十分に予想できたわけです。次は気象状況を判断しなければなりません。当時は夏の初めでして大変に暑いのです。暑いということは頻りに休憩をするということが予測できます。そして、その時には木陰に入るだろうと考えられます。」

③指揮官の性格をみる

「今度は今川義元という指揮官の性格を見ます。信長は「義元のお齒黒首を取ってくる」と言っています。義元はお齒黒をしていたというのです。彼は有名な文化人でしたからお公家さんの真似をして歯を黒く染め、眉を剃って細く描いていた男であったそうで、公家かぶれの生活をしていました。ということは、黒田長政とか加藤清正などのような猛将ではなかったということです。猛将であれば必ず先頭に立って率先して戦いますが、お公家さんの生活を理想とするような文化人は自ら率先して前線に立って戦うことなどしない男だとわかります。つまり、今川軍の司令部は前線ではなく、かなり後方にあるということが判断できます。」

④軍隊の性格をみる

「今度は指揮官が率いる軍隊の性格を見ます。二万七千の兵力で上洛しようとする馬鹿な大将の作戦計画など、戦術眼のある部下には「あなたのためなら粉骨砕身して命を捧げましょう」なんて言う者は一人もいないと判断できます。このことから、今川軍は義元的首さえ取ってしまえば、部下の連中は京都くんだりまで行こうなどとは思わずに引き返すだろうと、信長は判断したわけです。」

これまでの内容で、信長の実像について議論を行った。桶狭間の合戦において情報収集や分析により二方面作戦を行わないこと、そして、大軍とは正面から戦わず今川義元的首を取ることを戦術的成功の評価基準とし、その戦術を的確に実行できる一級の人物であると城野氏は信長を評価しているということであり、そして参加者も今回の学習を通じて信長が一級の人物であることには一応の納得を行えた。その信長の狭間の合戦の成果を通して信長の持つ科学的計算性を分析するという今回の学習内容を確認して、今回の学習会は終了となった。

